

前
入 学 試 験 問 題
国 語 (理科)

(配点八〇点)

平成二十八年二月二十五日 九時三〇分～一二時一〇分

注 意 事 項

- 一、試験開始の合図があるまで、この問題冊子を開いてはいけません。
- 二、問題はすべて新課程と旧課程とに共通です。
- 三、この問題冊子は全部で十七ページあります。落丁、乱丁または印刷不鮮明の箇所があったら、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 四、解答には、必ず黒色鉛筆(または黒色シャープペンシル)を使用しなさい。
- 五、解答用紙の指定欄に、受験番号(表面二箇所)、科類、氏名を記入しなさい。指定欄以外にこれらを記入してはいけません。
- 六、解答は、必ず解答用紙の指定された箇所に記入しなさい。
- 七、解答は、一行の枠内に二行以上書いてはいけません。
- 八、解答用紙の解答欄に、関係のない文字、記号、符号などを記入してはいけません。また、解答用紙の欄外の余白や裏面には、何も書いてはいけません。
- 九、この問題冊子の余白は、草稿用に使してもよいが、どのページも切り離してはいけません。
- 十、解答用紙は、持ち帰ってはいけません。
- 十一、試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

「一、新編『新編』諸君に於ては、

注意再取

平成二十八年二月二十五日 武部三〇代

(諸君八〇点)

園 語 (野採)



入学 始 問 題

第一 問

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

ホーフスタッターはこう書いている。

反知性主義は、思想に対して無条件の敵意をいだく人びとによって創作されたものではない。まったく逆である。教育ある者にとつて、もつとも有効な敵は中途半端な教育を受けた者であるのと同様に、指折りの反知性主義者は通常、思想に深くかかわっている人びとであり、それもしばしば、^aチンプな思想や認知されない思想にとり憑^つかれている。反知性主義に陥る危険のない知識人はほとんどいない。一方、ひたむきな知的情熱に欠ける反知性人もほとんどいない。

(リチャード・ホーフスタッター『アメリカの反知性主義』田村哲夫訳、強調は引用者)

この指摘は私たちが日本における反知性主義について考察する場合でも、つねに念頭に置いておかなければならないものである。反知性主義を駆動しているのは、単なる^bタイダや無知ではなく、ほとんどの場合「ひたむきな知的情熱」だからである。

この言葉はロラン・バルトが「無知」について述べた卓見を思い出させる。バルトによれば、無知とは知識の欠如ではなく、知識に飽和されているせいで未知のものを受け容^いれることができなくなった状態を言う。実感として、よくわかる。「自分はそれについてはいく知らないと涼しく認める人は「自説に固執する」ということがない。他人の言うことをとりあえず黙^アつて聴く。聴いて「得心がいったか」「腑^ふに落ちたか」「気持ち片づいたか」どうかを自分の内側をみつめて判断する。そのような身体反応を以^もてさしあたり是非の判断に代えることができる人を私は「知性的な人」だとみなすことにしている。その人においては知性が活発に機能しているように私には思われる。そのような人たちは単に新たな知識や情報を加算しているのではなく、自分の知的な枠組みそのものをそのつど作り替えているからである。知性とはそういう知^いの自己刷新^いのことを言うのだろうと私は思っている。個人的な定義

だが、しばらくこの仮説に基づいて話を進めたい。

「反知性主義」という言葉からはその逆のものを想像すればよい。反知性主義者たちはしばしば恐ろしいほどに物知りである。一つのトピックについて、手持ちの合切袋がっさいぶくろから、自説を基礎づけるデータやエビデンスや統計数値をいくらでも取り出すことができる。けれども、それをいくら聴かされても、私たちの気持ちはあまり晴れることがないし、解放感を覚えることもない。というのは、この人はあらゆることについて正解をすでに知っているからである。正解をすでに知っている以上、彼らはことの是非の判断を私に委ねる気がない。「あなたが同意しようとしまいと、私の語ることの真理性はいささかも揺るがない」というのが反知性主義者の基本的なマナーである。「あなたの同意が得られないようであれば、もう一度勉強して出直してきます」というようなことは残念ながら反知性主義者は決して言ってくれない。彼らは「是非の判断はすでに済んでいる。あなたに代わって私がもう判断を済ませた。だから、あなたが何を考えようと、それによって私の主張することの真理性には何の影響も及ぼさない」と私たちに告げる。そして、そのような言葉は確実に「呪い」として機能し始める。というのは、そういうことを耳元でうるさく言われているうちに、こちらの生きる力がしだいに衰弱してくるからである。「あなたが何を考えようと、何をどう判断しよう」と、それは是非の判定に関与しない」ということは、^ウ「あなたには生きていく理由がない」と言われているに等しいからである。

私は私をそのような気分させる人間のことを「反知性的」と見なすことにしている。その人自身は自分のことを「知性的」であると思っているかも知れない。たぶん、思っているだろう。知識も豊かだし、自信たっぷりじぶりにに語るし、反論されても少しも動じない。でも、やはり私は彼を「知性的」とは呼ばない。それは彼が知性を属人的な資質や能力だと思っているからである。だが、私はそれとは違う考え方をする。

知性というのは個人においてではなく、集団ぐんたいとして発動するものだと私は思っている。知性は「集合的叡智えいち」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。わかりにくい話になるので、すこしていねいに説明したい。

私は、知性というのは個人に属するものというより、集団ぐんたい的な現象だと考えている。人間は集団として情報を採り入れ、その重

要度を衡量し、その意味するところについて仮説を立て、それにどう対処すべきかについての合意形成を行う。その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力の全体を「知性」と呼びたいと私は思うのである。

ある人の話を聴いているうちに、ずっと忘れていた昔のできごとをふと思い出したり、しばらく音信のなかった人に手紙を書きたくなったり、凝った料理が作りたくなったり、家の掃除がしたくなったり、たまっていたアイロンかけをしたくなったりしたら、それは知性が活性化したことの具体的な徴候である。私はそう考えている。「それまで思いつかなかったことがしたくなる」というかたちでの影響を周囲にいる他者たちに及ぼす力のことを、知性と呼びたいと私は思う。

知性は個人の属性ではなく、集団的にか発動しない。だから、ある個人が知性的であるかどうかは、その人の個人が私的に所有する知識量や知能指数や演算能力によっては考量できない。そうではなくて、その人がいることによって、その人の発言やふるまいによって、彼の属する集団全体の知的パフォーマンスが、彼がいけない場合よりも高まった場合に、事後的にその人は「知性的」な人物だったと判定される。

個人的な知的能力は**いぶん高い**ようだが、その人がいるせいで周囲から笑いが消え、疑心暗鬼を生じ、勤労意欲が低下し、誰も創意工夫の提案をしなくなるとい**うような**ことは現実にはしばしば起こる。きわめてヒンパンに起こっている。その人が活発にご本人の「知力」を発動しているせいで、彼の所属する**集団全体の知的パフォーマンスが下がってしまう**という場合、私はそういう人を「反知性的」とみなすことにしている。これまでのところ、この基準を適用して人物鑑定を過つたことはない。

(内田樹「反知性主義者たちの肖像」)

〔注〕 ○リチャード・ホーフスタッター——Richard Hofstadter (一九一六～一九七〇)。アメリカの歴史学者・思想家。

○ロラン・バルト——Roland Barthes (一九一五～一九八〇)。フランスの哲学者・批評家。

設問

(一) 「そのような身体反応を以てさしあたり理非の判断に代えることができる人」(傍線部ア)とはどういう人のことか、説明せよ。

(二) 「この人はあらゆることについて正解をすでに知っている」(傍線部イ)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「『あなたには生きている理由がない』と言われているに等しい」(傍線部ウ)とはどういうことか、説明せよ。

(四) 「その力動的プロセス全体を活気づけ、駆動させる力」(傍線部エ)とはどういう力のことか、説明せよ。

(五) 「この基準を適用して人物鑑定を過つたことはない」(傍線部オ)とはどういうことか、本文全体の趣旨を踏まえた上で一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ(句読点も一字と数える)。

(六) 傍線 a、b、c のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

a	チンプ
b	タイダ
c	ヒンパン

草稿用

草稿用紙（切り離さないで用いよ）

この紙は、事務用紙の一種として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。用紙の用紙として用いられ、切離さずに用いよ。

第一 四

第二 問

次の文章は、鎌倉時代成立とされる物語『あきぎり』の一節である。これを読んで、後の設問に答えよ。なお、本文中の「宰相」は姫君の「御乳母」と同一人物であり、「少将」はその娘で、姫君の侍女である。

(尼上八)まことに限りとおぼえ給へば、御乳母を召して、「今は限りとおぼゆるに、この姫君のことのみ思ふを、なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ。今は宰相よりほかは、誰をか頼み給はむ。我なくなるとも、父君生きてましまさば、さりとともと心安かるべきに、誰に見譲るともなく、消えなむのちのうしろめたさ」を返す返すも続けやり給はず、御涙もとどめがたし。

まして宰相はせきかねたる気色にて、しばしはものも申さず。ややためらひて、「いかでかおろかなるべき。おはします時こそ、おのづから立ち去ることも侍らめ、誰を頼みてか、かたときも世にながらへさせ給ふべき」とて、袖を顔に押し当てて、たへがたげなり。姫君は、ましてただ同じさまなるにも、かく嘆きをほのかに聞くにも、なほもののおぼゆるにやと、悲しさやらむかたなし。げにただ今は限りと思ひ、念仏高声に申し給ひて、眠り給ふにやと見るに、はや御息も絶えにけり。

姫君は、ただ同じさまにと、こがれ給へども、かひなし。誰も心も心ならずながら、さてもあるべきことならねば、その御出で立ちし給ふにも、われさきにと絶え入り絶え入りし給ふを、「何事もしかるべき御ことこそましますすらめ。消え果て給ひぬるは、いかがせむ」とて、またこの君の御ありさまを嘆きめたり。大殿もやうやうに申し慰め給へども、生きたる人とも見え給はず。

その夜、やがて阿弥陀の峰といふ所にをさめ奉る。むなしき煙と立ちのぼり給ひぬ。悲しとも、世の常なり。大殿は、こまごまものなどのたまへること、夢のやうにおぼえて、姫君の御心地、さこそとおしはかられて、御乳母を召して、「かまへて申し慰め奉れ。御忌み離れなば、やがて迎へ奉るべし。心ばそからでおはしませ」など、頼もしげにのたまひおき、帰り給ひぬ。

中将は、かくと聞き給ひて、姫君の御嘆き思ひやり、心苦しくて、鳥辺野の草とも、さこそ思し嘆くらめと、あはれなり。夜な夜なの通ひ路も、今はあるまじきにやと思すぞ、いづれの御嘆きにも劣らざりける。少将のもとまで、

鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ
工とあれども、御覽じだに入れねば、かひなくてうち置きたり。

〔注〕 ○御出で立ち——葬送の準備。

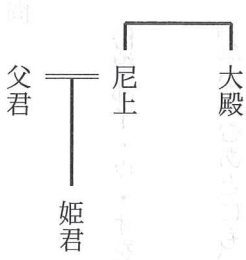
○しかるべき御こと——前世からの因縁。

○阿弥陀の峰——現在の京都市東山区にある阿弥陀ヶ峰。古くは、広くこの一帯を鳥辺野と呼び、葬送の地であつた。

○御忌み離れなば——喪が明けたら。

○中将——姫君のもとにひそかに通つてゐる男性。

〔人物関係図〕



設問

(一) 傍線部イ・ウ・オを現代語訳せよ。

(二) 「なからむあとにも、かまへて軽々しからずもてなし奉れ」(傍線部ア)とはどういうことか、説明せよ。

(三) 「鳥辺野の夜半の煙に立ちおくれさこそは君が悲しかるらめ」(傍線部エ)の和歌の大意をわかりやすく説明せよ。

草稿用紙 (切り離さないで用いよ) 国語学類室

宋魯青「西華」
翠「海」
綠「日」
肉

自然富貴用「天」
不「時」命「錄」
華「景」

山「世」
青「時」
海「意」
安「直」
對「人」
時「空」
谷

海「天」
一「天」
竹「羅」
開
海「琴」
對「山」
綠「露」
管

我「謝」
世「辭」
清「草」
木
只「育」
各「引」
苦「微」
世

真「冠」
空「惠」
前「之」
東「羅」
引「海」
山「青」
滿「葉」
一「刺」
上「人」
不「賦」
貴「由」

多量の文字を
用いて書かれた

この文字は、漢字の「西華」「翠」「綠」「肉」「天」「時」「命」「錄」「華」「景」「山」「世」「青」「時」「海」「意」「安」「直」「對」「人」「時」「空」「谷」「海」「天」「一」「天」「竹」「羅」「開」「海」「琴」「對」「山」「綠」「露」「管」「我」「謝」「世」「辭」「清」「草」「木」「只」「育」「各」「引」「苦」「微」「世」「真」「冠」「空」「惠」「前」「之」「東」「羅」「引」「海」「山」「青」「滿」「葉」「一」「刺」「上」「人」「不」「賦」「貴」「由」

京 三 則

第三問

次の詩は、北宋の蘇軾（一〇三七―一一〇一）が朝廷を誹謗した罪で黄州（湖北省）に流されていた時期に作ったものである。これを読んで、後の設問に答えよ。

寓居定惠院之東、雜花滿山、有海棠一株、土人不知貴也

江城地瘴蕃草木、只有名花苦幽独

嫣然一笑竹籬間、桃李漫山總粗俗

也知造物有深意、故遣佳人在空谷

自然富貴出天姿、不待金盤薦華屋

朱唇得酒暈生臉、翠袖卷紗紅映肉

林深霧暗曉光遲、日暖風輕春睡足

雨中有^レ涙亦^タ悽慘
月下無^レ人更^ニ清淑

先生食飽^{キテ}無^シ一事^ニ
散步逍遙^{セウ}自捫^{ナツ}腹^ヲ

不^レ問^ハ人家^ト与^ニ僧舍^ニ
拄^{ツキ}杖^ヲ敲^{タキ}門^ヲ看^ル修竹^ヲ

忽^チ逢^ヒ絶^ニ艷^{エン}照^{ラス}衰^ス朽^ヲ
嘆息無言^{ムクフ}措^ニ病目^ヲ

陋^{ロウ}邦何^{イブレノ}処^ニ得^{タル}此^ノ花^ヲ
無^レ乃^{カウ}好事^ズ移^{セルカ}西^シ蜀^{ヨリ}

寸根千里不^レ易^{カラ}致^シ
銜^{フクミテ}子^ヲ飛^{セルハ}来^{メシ}定^{コウ}鴻鵠^{コクナラン}

天涯流落俱^ニ可^シ念^{おもフ}
為^{ため}飲^ニ一^ソ樽^ソ歌^フ此^ノ曲^ヲ

明朝酒醒^{サメテ}還^{また}独^リ来^{ラバ}
雪落^{チテ}紛紛^{フフン}那^ソ忍^ビ触^ル

〔注〕 ○定惠院——黄州にあつた寺。 ○海棠——バラ科の木。春に濃淡のある紅色の花を咲かせる。

○土人——土地の人。 ○江城——黄州が長江に面した町であることを言う。 ○瘴——湿気が多いこと。

○嫣然——につこりするさま。 ○華屋——きらびやかな宮殿。 ○紗——薄絹。

○西蜀——現在の四川省。海棠の原産地とされていた。 ○鴻鵠——大きな渡り鳥。

○紛紛——乱れ落ちるさま。

設問

(一) 傍線部 b・d を現代語訳せよ。

(二) 「朱唇得酒暈生臉」(傍線部 a) とあるが、何をどのように表現したもののか、説明せよ。

(三) 「為飲一樽歌一曲」(傍線部 c) とあるが、なぜそうするのか、説明せよ。

草
稿
用
紙
(切り離さないで用いよ。)